

博士学位申請論文審査報告

申請者 橋野知子

論文題目 経済発展における市場・産地・制度
- 戦前日本の絹織物業における技術導入の経験から -

本論文の構成

はじめに本論文の構成を記す。

第1部 分析視角と絹織物産地の諸類型

第1章 分析視角と研究史

第2章 製品からみた明治絹織物業の地理的分布とその変化 - 定性的資料の再検討による府
県別観察を中心に

第2部 市場における諸問題と新技術への対応

第3章 輸出絹織物業の粗製濫造問題と産地 - 「領事報告」にみる粗製濫造の諸類型と羽二重
産地における制度的・組織的対応

第4章 内地向織物業における粗製濫造問題の実態と産地 - 新技術の導入と学校・共進会・市
場

第5章 織物産地の発展における工業学校の役割 - 染色関連学科卒業生の進路と特徴

第6章 絹織物産地の発展の多様性 - 桐生産地における生産組織と技術選択

第3部 結論

終章 結論と展望、残された課題

図表ならびに参考資料

参考文献

本論文の内容

本論文の課題は、戦前絹織物業における産地の発展の多様性に注目し、新技術による新たな製品の投入によって、市場においてさまざまな問題が発生したときに、地域分業の担い手がどのように対応したのか、どのような制度を構築することによって問題解決に導いたかを、明らかにしようとしたものである。

とくに、おもな対象地域として、群馬県の桐生産地に注目している。桐生を対象とした意味は、江戸期には先進地でありながら、近代に入ると新興の福井をはじめとする北陸の輸出絹織物産地に圧倒され、国内向先染織物や輸出向変わり織物へと限定されていった後進産地としての評価を、新技術導入による多品種少量生産をめざした産地として新たに再評価しようという問題意識による。

第1部は分析視角である。第1章の分析視角では、絹織物産地において化学染料や力織機という新技術導入にともない、政府による情報チャンネルとして領事報告や共進会の果たした役割、さらには染色・染織講習所・工業高校など教育制度や機関の果たした役割に注目しながら、産地を、マーシャルのいうインダストリアル・ディストリクトよりもはるかに有機的なシステムをなしていたとして把握しようとしたことである。ここでは産地が著者のキー概念として重視されている。

第2章では、マクロ的な視点から府県別統計を中心に、明治初期から中期にかけての絹織物産地の地理的分布を明らかにし、手織から力織機化の過程で、産地が多品種少量生産から少品種大量大量生産へと分化を遂げていった様子を描いた。

第2部は具体的分析である。第3章では輸出絹織物業の粗製濫造問題と取り上げる。領事報告の分析から、領事報告が製品の品質の情報チャンネルとして機能し、産地はそれに対応して検査の強化や精練法の技術的向上を図り、地方政府や農商務省もそれに積極的に関与したことを、おもに福井の羽二重織物産地の事例から明らかにしている。産地を取りまく機関・制度、さらには行政が有機的につながりながら、産地発達の役割を果たしたことを指摘している。

第4章では、第3章に引き続き内地向織物業の粗製濫造問題を取り上げる。ここでは、共進会の審査報告の分析によって、粗製濫造を従来のモラルハザードという議論ではなく西欧化学染料という新技術導入にともなう技術的困難という問題を提起した。そのために、産地は染色・染織講習所を設置し、さらには政府の農商務系技師を招聘するなど、機敏に対応したことを初めて明らかにした。こうして、前章の領事報告と並んで共進会・博覧会などが、製品に対する情報を市場の外から産地に伝達する役割を果たしたことを強調した。

第5章では、織物産地の発展における工業学校の役割を解明している。全国の工業学校の後身である工業高校、12校を対象として、卒業者の進路を集計している。その結果、彼らの進路は紡績・織物関連産業への就職、機械工業への就職、検査・教育機関への就職など、学校が産地外の大企業への流失とともに、産地の機業経営の再生産機関として機能したことに注目した。産地の有機的一環として工業学校の果たした役割を再評価しようとした。

第6章では、絹織物産地の発展の多様性について論じる。ここでは、従来研究史として注目されてきた、力織機化による大量生産型産地とは異なる発展方向、すなわち多品種少量生産の選択が、なぜなされたかという問題を、桐生絹織物産地を事例として、提起した。このため、工場統計表の桐生の個票や当該地域の桑原家文書の分析を通して、農村の織元がみずから工場(内機)をもち、周辺に賃機(外機)を配置しながら、織元工場での生産が、周辺賃機のOJTの役割の役割を果たしながら、産地全体として技術的に高度な製品を生産することが可能であった、という興味深い推定を行っている。すなわち、桐生では力織機化に対抗しうる生産組織と技術的選択が可能であったと再評価したのである。

第3部は結論である。本論文は、明治の近代化に直面した日本の各絹織物産地が、新市場と新技術の導入という変化に対して、どのように対応したのかを課題とした。その結果、各地の絹織物産地、とりわけ産地桐生を焦点としながら、指向する市場の差異が、個々の経営体にとって、新技術導入や生産組織、さらには産地全体の分業のあり方を規定したと言う。すなわち、羽二重のように輸出市場向け最終製品であるか否かによって、力織機化の時期やスピードの差異をもたらし、また指向する製品の差異が、技術選択と生産組織の差異をもたらしたのであり、力織機化の遅れだけで産地の評価をすることはできず、絹織物産地の発展の多様性を認めるべきことを主張した。

以上、本論文は、絹織物業を対象として歴史的な分析として、市場 - 情報 - 機関・制度 - 製品の相互関係を明らかにし、また制度と組織を有する有機的構造もった経済主体としての産地概念を、いっそう具体化する試みであると言える。

評価

以上のような内容をもつ本論文は、近代日本経済史の研究として以下の点で高い評価を与えることができる。

本論文の第一の寄与は、産業への技術導入と制度形成を、産地を研究対象にすえることによって分析していることである。産地が幕末・明治以来の織物業の特徴であることは以前より指摘され

ていたが、それらの既存研究では、特定の産地の「地域的发展」として個別的に捉えられ分析されることが多かった。しかし本論文では、より一般的に、総合的なシステムをもつ地理上の連合体として産地をみる視点が新しい。経済史家としての橋野知子氏の特色は、経済発展論をへて近代日本の経済史を専攻するようになったという経歴からも窺えるように、経済発展論の視点を活かした歴史分析ができるところにある。といっても開発論的な発想を、そのまま歴史研究に投影させたり、理論モデルを史料に当てはめようとするのではなく、戦前期日本の経済史に根ざした問題設定を行い、しっかりと史料を集め、丹念に整理し、そこから浮び上がってくる事実を大事にして議論を組立ててはいる。そのうえで、特定地域の産業発達史の一章としてではなく、より普遍的に、市場・制度・技術といった経済学的用具によって分析するという試みがなされたことを評価したい。

第二に、産地発展には多様な途があり得たことを明らかにした。これは従来、力織機の導入率や問屋制の解体度が産地発展の指標に使われてきたために、後れた産地とみなされてきたところでも、生産される製品や当該期の技術・市場条件によって異なった選択肢があったことを、データによって裏づけた。本論文が対象とする産地では多品種少量生産の桐生がその例であるが、生産組織および技術選択のうえで、福井のような少品種大量生産の羽二重産地とは明瞭に異なった方向への発展をたどったことが示された。

第三に、産地の対応を分析するために、多様なデータ群を利用していることも特色である。明治・大正・昭和初期のさまざまな統計類を 史料論的にも分析的にも 周到な手順を踏んで利用する一方で、従来は教育史の領域と考えられていた分野のデータ、領事報告、共進会の審査報告といったタイプのデータ、さらには若干の個別経営の個票データをも巧みに利用・分析している。このことによって、これまでの経済史における個別企業の経営文書を使うタイプの実証研究では見落とされていた、産地のピヘイビアの一端を明るみに出すことに成功した。

第四に、教育にかんしては、かつての高等工業高校を母体とする工業高校へのアンケート調査などによって、それらの多くが、もともとは明治期の産地が当面した「粗製濫造」問題の中核をなす技術的諸問題への対応として、産地のイニシアティブによって(町立あるいは組合立として)設立されたものであることを明らかにした。それによって、たんなるデータ発掘と利用の域をこえて、染織を中心とする中等工業教育の産業発展にたいする意義を具体的な事例・背景のもとで明らかにしたことは、これまでになかった新領域開拓的な試みとして評価できる。

以上のような特色をもつ本論文であるが、問題点がないわけではない。

第一に、本論文の場合、「産地」の概念・定義は決定的な重要性をもつ。しかし、ここでなされている定義——一つの産業を中心とした関連業種からなる産業集積、熟練・技術の蓄積、および同業組合のような外部への窓口組織によって産地を規定している——は普遍的にすぎ、本論文が対象とする福井や桐生の事例は包含されるものの、実際にはほとんどすべての絹織物特産地が含まれる。しかし、それらの中には「先進的な産地」と「後進的な産地」の大きな開きが存在し、なぜ産地によって発達の水準が大きく異なったのかを説明しなければならなくなる。換言すれば、「産地」は同質的でないのではないかとの疑義を生ぜしめる。

第二に、「粗製濫造」問題を粗製の面のみに限定して捉えている。そのこと自体に問題はないが、濫造の問題は市場概念とも直結している。本論文での市場の定義は不明確だが、主に取引に限定されているように読め、価格や品質に関する言及は少ない。したがって、「市場」と「制度」の関係、また「市場」と「産地」の関係が不明確と感ぜられてしまう。これとの関係で、モラル・ハザードがなぜ生じたのか、それは産地のあり方とどのように関連していたのか、などが問われていない。橋野氏は産地を「経済主体」と捉えようとしているが、いかなる意味で他の経済主体と同列に扱えるのかは必ずしも明瞭でない。今後の課題である。

第三に、これは本論文自体の問題点ではないが、中等教育と産地の発展との関連を新たな研究領域として発展させてゆくためには、産地のイニシアティブで設立された学校が、その後に官制化され、制度化された教育システムに固有の論理で運営されはじめてからの時代と、異なった機能をもつようになってからの産業との関連のあり方をも視野にいれた研究が、今後深められることを望みたい。

第四に、生産組織と技術選択の事例として取り上げた桐生桑原家では、織元と周辺農村の賃機とをOJTによる合理的結合として推定しているが、両者の技術的關係を実証しているわけではない。この興味深い指摘をさらに発展させてほしい。とくに、産業集積論からも、問屋制度・農村の織元(内機)と周辺農家(外機)の技術的連関・労働力関係、さらには、産地全体の技術的連関を解明することは、今後の課題であろう。

最後に、本論文の、「経済発展における市場・産地・制度」と「戦前日本の絹織物業における技術導入」をキーワードとするタイトルおよび各章の構成を考えると、もう少し多くの産地の具体例について触れる章があって、全体的な統一が保たれているとよかったと思う。少なくとも終章では、各章を統合し、全体の構図のなかでまとめる試みをして欲しかった。

これまで、本論文の評価として、すぐれた内容とともに若干の問題点を指摘したが、これらは今後の課題であり、本論文の価値を否定するものではない。

以上、橋野知子氏の学位申請論文は、所定の審査および面接の結果をふまえて、一橋大学博士論文(経済学)に値するものと、審査員一同判断する。

2002年9月26日

清川雪彦

斎藤修

佐藤正広

鈴木良隆

森武磨